

●岩松了

候補作品の中で『草、のびて、家』守田慎之介、が頭ひとつ抜きん出ていると思った。それは他の作品にはない言葉と人物との関係に思いを至らしめていると思えたからだ。そこにあるのは《言葉そのものに意味はない》という視点であり、その視点と呼応するシチュエーションが《そこにいるしかない人たち》というもので、見事な喜劇になっている。学校の教頭先生である父親がエロビデオを販売して捕まった、その残された家族の、マスコミと近隣の人たちの好奇？同情？憐れみ？などに取り巻かれ、家の中にいるしかない時間のドラマである。その事件とは直接結びつかない彼らの会話は、事件そのものとの距離を計りかねているからであり、心配顔で訪ねてくる近所の人や父親の同僚が事件の重大さを言説することを疎ましく感じる中に、事件に対する彼らの無力さを感じさせる、という仕組みだ。これは、事件について彼らがどんな言い分を持ったかではなく、事件によって彼らがどんな状態に陥ったかのドラマであるからで、こんな時にもお腹が空くことや、こんな日にも犬を散歩に連れて行くのかの兄妹の言い合い(実は訪ねてきた人から逃れるためだったりするのだが)は、実はドラマから切り離された人たちのドラマと言えるわけである。近隣の人々の好意ともとれる差し入れされたおにぎりに、自分達に対する思惑のないまぜになったものを感じ、それを最後にみなで頬張る、という流れは、おにぎりという小道具を巧みに使って秀逸だ。この《体に力のみなきらない時間》こそが、この作者の表現したかったことで(事件の後遺症とはそんなものだ!)、二三の欠点は差し引いても、志の高さは評価してしかるべきものと考えられる。

次に私が推したのは『チッタチッタの抜け殻を満たして、と僕ら』河野ミチユキ。中島かずき氏と同様、一度目と二度目の読後感がこれほど違うのも珍しかった。

それは何故であろうか。たぶん一度目「うるさい」のだ。おぼろげにわかるのはチッタチッタ(知的障害者の蔑称)と呼んでいた女の子(額に線路のような傷跡がある)が亡くなって20年、彼女と遊んでいた友達がその家にお盆に訪ねてきている、というもの。始まりからして、りよっけという男とちりという女が、チッタチッタが好きだったものを言い当てるゲームにチッタチッタの幽霊がからむ、そのひどく幼児的な遊びがうるさい。というか、たいして面白いとは思えない。けれども、それをターチロという別の男が見ている、というところが、そのうるさを客体化させる。そうか、これはりよっけ、ちり、チッタチッタのいびつな三角関係の話か、とにわかにおぼろげだったものが像を結び始める。後半その三人が居合わせるとき、ちりが額にチッタチッタの真似をして一本の線を引いてくる、そして、自分の方がチッタチッタのことを好きだったと言い、りよっけになぜチッタチッタを嫁に貰わなかったのか、とせまる、りよっけはチッタチッタの前髪を切り、傷跡をあらわにする、というシーンがあって、このシーンの輝きが全編を、先に言ったうるささから解放する。とてもいいシーンだ。

他の作品にも一言ずつ言及しておく。

『あまえんぼう山頭火』村山優一郎。わがまま勝手な山頭火のことを周りの人たちが、それでも憎めないなどと言うが、その説明だけで、山頭火が憎めない人物になりうるわけではない。もっと山頭火の苦しみ(あの人は苦しんでると周りの者が言うからには)を責任をもって考えて欲しい。息子の健が自分の孤独を感じる、そのモチーフに作者自身もっとこだわりをもてばいいのに、と思った。

『あなた、咲いた』日下渚。何度か「寂しい」という言葉が使われるが、どうしてもそれが雰囲気には感じられない。「寂しい」に対する反対の世界を想像してこそその寂しいではないのかと思った。時折現れる幽霊の女の子がもっと具体的な欲望をもっていいのではないかという意見が選考会であったが、なるほど、と思った。

『晴レタラ、見エル』山下晶。劇作家がある戯曲を書くことが劇中にメインの出来事として組み込まれているのだが、まわりでその内容のことを騒いでいるほどには戯曲そのものについて作者が考えてないから、書かれてる戯曲が面白いものであると思えない、そこが問題である。てことは菊川という作家がちゃんと悩んでいるとは思えない、ということになる。

以上五作品が今回の候補作であった。

河野さん、おめでとう！

これを機にさらなる精進を重ねてください。

●中島かずき

審査会では『あなた、咲いた』と『チッタチッタの抜け殻を満たして、と僕ら』のどちらを大賞にするかで議論になった。

『チッタチッタ』は不思議な作品だ。

一読した時の印象は、「なんとも読みにくいな」だった。

登場人物が全員あだ名であるため、誰が誰やらわかりにくく、そこに導入の不自然さが加わり、なかなか入りづらかったのだ。

作者の河野さんは、『義務ナジウム』で第二回九州戯曲賞佳作を受賞している。

あの作品の着眼点が好きだったので、今回も楽しみにしていたのだが、正直期待はずれだと感じてしまった。

ところが、再読してみると、印象がガラリと変わった。

チッタチッタと呼ばれる少女。それが知的障害者という意味であることを知っていながらあだ名として呼んでいた友人達。無自覚な差別をしていた子供時代を意識しないまま、

彼女の家に盆のお参りに集う成長した彼ら。早世したチッタチッタは無垢な少女の幽霊として彼らの前に現れる。彼女は幼い日のままの姿で、彼らと遊びたがる。

その構図は、自分が幼い頃行った無自覚な差別の記憶を呼び起こし、胸をざわつかせた。

最初の読みにくさがなんだったんだというくらい、描かれている世界の柔らかな残酷さが、読んでいる心をひりつかせたのだ。再読でこんなに印象が変わる作品も珍しい。

そのざわつきひりつきに、僕はこの作品を大賞に推した。

『あなた、咲いた』は、読後感のよい作品だ。人の善意を作者自身が信じているのだろう。その気持ちが素直に作品に出ている。

ただ、長女の恋愛相手の勘違いなど、登場人物が作者の考えた展開の都合で動かされている感があり、そこが気になった。

いい人だけしか出てこない話を書こうとする作者の姿勢は好ましい。そういう人がいいと思う。

でも、その場合「いい人」というものをどれだけ視点を変えて見ることができるか、通り一遍ではなく描写できるか、それが作品に深みを与えると思う。

●横内謙介

日下渚さんの『あなた、咲いた』は三代の女たちが庭に花の咲く地方の小さな家で心と命を繋いでゆく温かな物語で、男がいない家で、母とその母とが役割を継承しつつ暮らす中での、それぞれの屈託が丁寧に書かれていて好感を持った。せっかくだから「いない男たち」に、もっと工夫があって、逆の存在感を持たせたら更に魅力が増しただろう。あと場面転換が細か過ぎて、テレビシナリオ的なのも残念だった。しかし書き続けたら、いつか傑作を書く力のある作家だと思った。

河野さんの『チッタチッタの抜け殻を満たして、と僕ら』が日下さんの作品との決選投票の結果、僅差での受賞となったのであるが、こちらは舞台の時間と空間をよく知っている作家だと思った。私としては二十年ぶりに友人たちがチッタの家を訪れている理由や、チッタと妖怪との関係などに、腑に落ちないところを感じていたが、いろんな曖昧さも含めて舞台になったらどうなるのか、とか演出してみたいとか、そういう刺激を与えてくれる魅力的な言葉に溢れているのだなあと、審査員諸氏の応援演説を聞いて作品を見直した。受賞に異存はなく、河野さんには更なる飛躍を期待する。

この賞は、選考会の後に候補者たちとの歓談があり、いわば種明かしを直に聞くことが出来てしまう。選評にそれを踏まえるのは障りがあるかもしれぬが、守田さんの『草、のびて、家。』山下さんの『晴レタラ、見エル。』の二作は、素晴らしい着想と、それをまとめ上げる力を持ちながら、テーマの追求に甘さが残ったのかもしれないと思った。作家の思いを直に聞いていると、とても深く、興味深かった。そこにもっと執着して描き切っていたら、大傑作になったろうにと、私が悔しくなってしまった。おふたりには同じテーマで、もう一度アプローチしてみることをお薦めしたい。

『あまえんぼう山頭火』の村山さんは、これがほぼ処女作だということであったが、初めてでこれだけ書けたら、今後がとても楽しみである。骨太で、なぜに、何を書きたいのか、明解な理由が作品に溢れているところがとても良い。

●岩崎正裕

2回目の九州戯曲賞の審査を依頼され、うれしかった。関西を拠点とする私にとって、福岡や長崎の演劇人との交流は十数年に及び、折に触れ、途上にある表現の悩みなどを共有してきたつもりだ。

今回の応募作に傾向のようなものがあるとすれば、概ね共通項は「家族」であった。その関わりの善良さが信じられていた。

河野ミチユキさんの『チッタチッタの脱け殻を満たして、と僕ら』は、その善良な眼差しを持ち得ながら、唯一、葛藤から残酷さへ突き抜けているように思われ、推した。「チッタチッタ」とは差別的な地域語であるらしいが、音感としては、他地域に暮らす私にはそのように響かない。そこが気がかりではある。しかし、あえてこの言葉をタイトルとしたことに、タブーを乗り越えようという、作者の意図を感じた。それは演劇への意志でもある。

山下晶さんの『晴レタラ、見エル』にもスタイルへの拘りが見えて、挑戦的だった。日本語と韓国語が飛び交う世界観に可能性を感じる。しかし、この劇は読むより観る方がきっと面白いに違いない。そのような意味で、受賞には一步届かなかった。

審査会後の交流会では、最終選考に残った作者の方々と話す機会を得た。『あなた、咲いた』を書いた日下渚さんの柔らかな雰囲気、なるほど、それでこの作風か、と納得もした。私戯曲であるなら読み方も変わるな、と。

しかし、上演でなく、文字として手渡された以上、戯曲は文学なのだ。
今後、応募される方は、それを肝に銘じて、丁寧に自身の世界を描いて欲しいと思う。

●前田司郎

「悔しい」と思える作品には出会えなかった。全体的に良い話でまとめようとして書かれたものが集まっていた印象を受けたので、そういうのを好む方が最終候補を選んだのかと勘ぐったが、どうも違うらしい。最初に思い描いた物語に従えられてしまっているように思う。プロットは主人ではなく、奴隷であるべきだと僕は思うのだけど。主人は作家の欲望であるべきだと。

「あまえんぼう山頭火」生真面目な作品で、学校を退職した先生が書いたものじゃないかと思った。逸脱がない。話をぶち壊して困って、それをどうするかで悩む必要もあるのでは？丸く収める事に終始してしまっている印象。あと山頭火じゃなくても良いんじゃないの？とってしまった。

「晴レタラ、見エル。」あらすじを読んで面白そうだなと思ったが期待ほどではなかった。構造が上手くいかされていないように感じた。あと、なんで笑わそうとするのか？安い笑いは、何かの手段としては意味があるかもしれないが、それが目的になっているような箇所が見受けられた。スキンの話や、シャアの人とか。笑いは稽古場でつくるものと割り切って、戯曲で笑わそうとするのをやめ、構造をいかせるものを書くことに集中してみてもはどうだろうか？僕はこの戯曲を2番目に推した。

「草、のびて、家。」登場人物のカードが伏せられていて、最後まで一枚も捲れないという印象。もう少しカードが捲れれば、どんな手役を持っているのか、想像しやすくなる。表面的な状況しか描かれておらず、芯に想像がいき辛いと思う。案外これ全員ブタなんじゃないの？とってしまう。
ただ、この作品が一番、上演してみたら面白いかも知れないと思い、この戯曲を2番目に推した。

「チッタチッタの抜け殻を満たして、と僕ら」大人がまるで子供みたいに読めてイライラした。さらに妖怪もただの笑かし要員の様に見える。一番、僕が馴染めなかったのがチッタチッタの障害の度合いや方向が物語りに都合よく作られているように感じたことだった。人間というより、妖怪に近く描かれていたのではないか？差別されていた人々が伝承

の中で妖怪になっていったという背景を利用しているのかな？とも思ったが、ここに描かれている妖怪はコミカルで愛らしく（観客に媚びる性質を持っている）描かれていて、チッタチッタもそちらに入れられてしまっているように思った。

良いところも沢山あった（それらは他の審査員の方が書かれていると思うので省く）が、僕はこの作品を高く評価できなかった。

「あなた、咲いた」セリフに一番魅力を感じた。内容も破綻なく、小さなありふれた感情をしっかり書けていると感じた。ただ、ト書きで読む分には良いが、舞台上で上演するとなると厳しいだろうと思える描写が多かったと思う。空襲の思い出が蘇えるところなど。また朝香の恋の結末があまりにお粗末だと感じた。お父さんに似ているから付き合うのをためらうって言うても、どれだけ似てるんだよ。全てが舞台の外でのことで、舞台との繋がりが携帯の待ち受けのみではあまりに窓が小さすぎる。とはいえ戯曲としては一番好感がもてたし、セリフに力を感じた。僕はこの作品を一番に推した。